

呼吸器科外来を開設するにあたって



秋田大学医学部 保健学科・教授
しおやたかのぶ
塩谷隆信 医師

西野克寛院長と秋田大学の同級生というご縁もあり2007年4月より呼吸器科外来を担当しております。近年、高齢化社会の到来、アレルギー、喫煙、大気汚染などの問題から呼吸器の病気を持つ方が増加しております。最近、問題になっている呼吸器疾患についてご紹介したいと思いますので、症状などで思い当たる方がいれば、是非、外来でご相談いただければと思います。

※塩谷教授の診察日は11月は2日(金)と30日(金)、12月は28日(金)の予定です。

1) 気管支喘息

(きかんしぜんそく)

気管支喘息は空気の通り道である気管支がアレルギーなどで炎症を起こし過敏になり、何かの刺激で腫れたり痰がでたりして狭くなり呼吸が苦しくなる慢性的の病気です。「ぜんそく」というと「小児喘息」、「アレルギー」と思い浮かべる方も多いと思いますが、大人になってから喘息になる方も多く、また、必ずしもアレルギー体質の人だけがかかるとは限りません。気管支喘息は常に症状があるわけではなく、時間や体調、ストレスなどで強い発作が出たり症状がなかったりします。また、咳だけが生じる咳喘息もあります。本当の体の調子が主治医にうまく伝わらないことがあり、単なる風邪(かぜ)と間違われ診断が遅れることもあります。またダニの除去といった生活環境を改善することで症状を軽くすることもでき、医師の治療だけでは不十分で自己管理が極めて重要な病気です。最近では、非常に効果のある抗喘息薬が開発され、気管支喘息の患者さんの症状の軽減に役立っています。

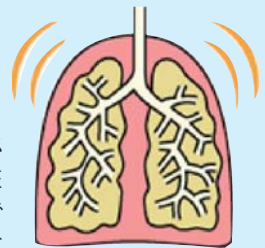


2) COPD

(慢性閉塞性肺疾患)

まんせいはいそくせいはいしっかん)

COPDは、慢性閉塞性肺疾患といいますが、昔は、肺気腫・慢性気管支炎と呼ばれていた病気です。主にタバコが原因で肺胞が拡張・破壊され、細い気管支が炎症のため狭くなる病気です。肺胞とは、酸素と二酸化炭素を交換する組織です。息を吸うときには、肺に空気が入っていきますが、COPDでは吐き出すときにうまく空気が肺から出て行かなくなります。徐々に進行し、肺胞が拡張と破壊を繰り返すと、ブタという袋を形成してしまいます。そうして、正常の肺の血管が細くなったり、肺全体が膨張し、呼吸筋である横隔膜を押し下げたり、心臓を圧迫したりします。慢性の咳と痰、労作時の息切れ、坂道や階段を上がる時に苦しいなどが主な症状です。COPDではまだ病気を直す薬がないため、治療としては気管支を拡張する薬を用い呼吸を楽にし、もし進行して酸素欠乏状態になれば在宅酸素療法や呼吸リハビリテーションを行います。



市民公開講座のお知らせ

薬剤による神経機能回復の提唱者としてご高名な米国スミス・ケトルウェル視覚科学研究所の笠松卓爾先生と秋田県立リハビリ精神医療センターの千田富義所長をお迎えし、機能回復に関する会を開催することになりました。市民の皆さまも多数ご参加くださるようお願い申し上げます。

■日 時:11月20日(火) 17:30~19:30

■場 所:市立角館総合病院 会議室

■内 容 17:30~18:15 演題(1):障害とリハビリテーション

演者:秋田県立リハビリ精神医療センター所長 千田 富義氏
《座長:市立角館総合病院脳神経外科 山口 卓氏》

18:15~18:30 演題(2):カテコールアミンは運動機能を回復する!?

演者:市立角館総合病院 脳神経外科 西野 克寛氏
《座長:市立角館総合病院脳神経外科 山口 卓氏》

18:30~19:10 演題(3):脳の可塑性—大人の脳はどれほど可塑的か

演者:米国サンフランシスコ、スミス・ケトルウェル視覚科学研究所
笠松 卓爾氏
《座長:岩手医科大学 眼科 町田 繁樹 准教授》

19:10~19:30 総合討論

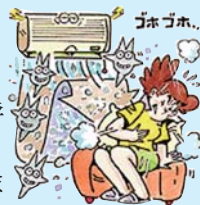
■対 象:一般市民(医療関係者)

■問合せ:市立角館総合病院総務企画課(担当 富木) TEL(54)2111(内線167)

3) 呼吸器感染症

(こきゅうき・かんせんしょう)

風邪、急性気管支炎、肺炎などを総称して呼吸器感染症といいますが、細菌、マイコプラズマ、クラミジア、ウイルスなどの微生物が原因となります。中でも肺炎は日本人の死亡原因の第4位で2004年には9万5千人が死亡しています。ウイルス感染ではインフルエンザが最も重要で、冬から春にかけて香港A型、ソ連A型、B型の流行がみられています。インフルエンザによる肺炎もみられますが、肺炎球菌など細菌による二次感染も起こり易くなり、インフルエンザが流行した年は肺炎による死亡率の増加がみられます。アデノ、パラインフルエンザ、RS、コロナ、麻疹などのウイルスも肺炎の原因となります。3年前に、コロナウイルスは新型肺炎・重症急性呼吸器症候群(SARS)の原因として世界中で注目されていましたが、幸いにも日本では流行しませんでした。インフルエンザの発病予防法として現在ワクチン予防接種と抗インフルエンザ薬の予防内服があります。感染しても発病しなかったり、発病しても軽症化できますので、慢性呼吸器疾患患者や高齢者には流行期の前に予防接種を受けることをお勧めします。



4) 間質性肺炎

(かんしつせい・はいえん)

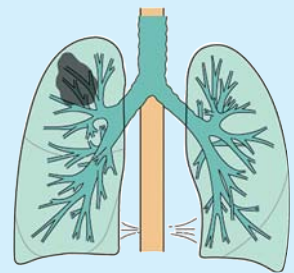
間質性肺炎というと、聞き慣れない方が多いと思います。別名を肺線維症(はいせんいしょう)ともいいます。正常な肺は、目の細かいスポンジのような構造をしており、息を吸えば膨らみ、息を吐けば縮むという動きをスムーズに行っています。何らかの原因で、この柔らかい肺に、線維化が起これ、肺が固く縮んでゆき、ついには呼吸ができなくなり、時には死に到ることもある怖い病気です。原因・病態・治療法など、まだまだ解明されていない部分も多く、厚生労働省の特定疾患に指定されています。発病から10~15年で約半数の方が亡くなり、肺がんを合併することなどが知られています。近年、アスベストが社会問題になっていますが、アスベストも間質性肺炎の原因となることが知られています。



5) 肺がん

肺がんは、肺において異常な細胞が制御を失って増えている状態です。しかし、この異常な細胞は体の外から入ってくるものではありません。もともと肺を形作っている細胞から変異を遂げてできてしまうものなのです。増殖した肺がん細胞は無意味な塊を形成し、肺の機能を侵していきます。しかし、肺という臓器は大きいのでときに何年もものあいだ症状がでることがなく、がん細胞が成長を続けることもあります。症状がでる場合にも、初めはしつこい咳程度であり風邪ではないかと思えば見逃されることもあります。

肺がんは日本においても最も多いがんになりました。患者さんの半分以上が男性ですが、最近では女性の肺がんも増加しています。これは女性喫煙者の増加が関係しているといわれています。実際、肺がんの患者さんの多くは喫煙者です。科学的にもタバコと肺がんに関係があることがすでに証明されています。しかし、タバコを吸わない人に全くがんが出来ないというわけではなく、少数ながら非喫煙者の肺がん患者が存在することも事実です。肺がんは初期であれば外科手術でがんの部位を取り除くことで治癒できます。手術できない肺がんに対しても放射線療法や抗がん剤などでがんを小さくすることができます。近年は痛みや苦しみを軽くする緩和療法が進歩してきました。



広報せんぼく9月号でもお知らせしましたように、平成19年5月から当院では、昭和大学横浜市北部病院消化器センター(工藤進英教授、大仙市刈和野出身)から派遣された医師が消化器科の診療を担当しております。

工藤進英教授は知る人ぞ知る、大腸内視鏡の診断と治療の世界的な権威で、実際、世界70カ国以上から研修医を受け入れておられます。これを機会に平成20年以降、仙北市は大腸癌の予防事業などを充実することになり、当院も秋田県で死亡率上位をしめる大腸癌の予防のために、鋭意努力することになりました。

つきましては、テレビや新聞などでご存知の方も多いと思われそうですが、工藤進英教授を地元仙北市にお迎えして以下の内容でお話を拝聴いたしますので、多数のご参加をよろしくお願い申し上げます。

- 日 時:11月22日(木) 19:00~20:00
- 場 所:仙北市立角館樺細工伝承館
- 演 題:大腸癌はこわくない
- 講 師:昭和大学横浜市北部病院副院長
消化器センター長 工藤 進英 教授
- 対 象:一般市民(医療関係者)
- 問合せ:市立角館総合病院総務企画課(担当:冨木) TEL(54)2111



このほど、仙北市カーヌー協会(会長・安杖正義)から市立角館総合病院へAED(自動体外式除細動器)ハートスタートFR2並びに収納ボックス一式が寄贈されました。ありがとうございます。同院では1階外来ホールに設置いたしました。